

# 「オネエ所長の調査ファイル」 #4

山崎浩治

1

「二人で飲んだあの夜のことを覚えてる、トオルちゃん？」

「所長がベロベロに酔っ払って裸踊りした晩ですか」

「あれからあたし、生理が来ないのよ。ひょっとして妊娠したんじゃないかしら。トオルちゃん、あの夜、何か悪さした？」

「キモイ冗談はやめて下さい！」

「それとも、これが閉経？ あたしの`女、がついに終わっちゃったのかなあ……」

「そもそも始まってないのだと思いますが」

「あら、そう」

「それより所長、こんなところに突っ立っていたらオレたち、不審者として通報されませんか？」

ある平日の早朝、金沢市内にある中学近くの路上で「金沢プライベート・リサーチ」のオネエ所長・市山とイケメン調査員の透が張り込みをしている。市山は三つ編みしたカツラに白のブラウスとベスト、スカートというOL風ファッションだ。通学途中の中学生たちがそんな市山を見ては連れ立つ友人の肘をつつき、クスクス笑いながら通り過ぎていく。市山自身は通勤OLを気取った変装のつもりだろうが、これでは不審者というよりも変質者に近い、と透は思う。

今回の依頼人である金沢市の会社員・智子(39歳)から「中2の一人息子が同級生3人からイジメを受けている」と相談を受けたのは昨日のことである。金銭を脅し取られ、暴力も受けているらしい。市山と透は依頼人の息子の日常を知るべく、登校時刻に偵察に来たのだった。

「あの子のようね」

青白い顔色に、ひょろりとした体型の見るからに気弱そうな優太(14歳)がうつむき加減で歩いてくる。そこへ背後から走ってきた体格のよい男子3人が優太をからかい、まとわりつく。しかし優太は唇を噛んだまま、暗い顔で目を伏せていた。「あんまり時間の余裕はなさそうね」と、市山がぼつりとつぶやく。

2

「社会で起きるあらゆるトラブルに対応する基本は証拠集めよ」

市山のアドバイスを受けた智子は息子の頭部に受けた傷跡の写真を撮影、医療機関へ行って診断書をもらった。脅し取られた金銭については日時と金額を記録。一方、透はネット掲示板やラインにあたって、優太への誹謗中傷が記されていないか調べたが、ネットイジメの事実は確認できなかった。

「一通り、イジメの証拠がそろいました。学校に談判に行きましょう！」

透が勢い込んで言うと、市山が首を横に振った。

「依頼人は担任教師に相談したけど、話にならなかつたらしいわ」

「だけど、今回はちゃんと証拠があるんですよ！」

「加害者の子どもを職員室に呼び出して説教すれば解決する保証があるの？ 逆恨みされて、イジメが倍返しされたどうするつもり？」

「今回のイジメは恐喝罪に傷害罪と立派な犯罪です。警察に被害届を出しましょう！」

「被害金額は1万円以下。怪我といっても全治1週間の軽傷よ。忙しい警察が本気で取り合ってくれるかしら」

「子どもが受けた心の傷は金額や全治の期間で測れませんよ！」

「もちろんそうよ」

「それなら裁判に訴えて……」

「裁判に勝って加害者が慰謝料を払ったとして、イジメをやめるとは限らない。そもそも依頼人は、あまりおおごとしたくない、と言ってるの。母ひとり子ひとりの生活で、問題を大きくして転校しなければならなくなる事態は経済的にも困る、って」

「それじゃ、どうすればイジメは止められるんです？」

「イジメっ子たちの住所は調べてある？」

「ええ、もちろん……まさか相手の家に乗れ込むんじゃ？」

市山が不敵に微笑んだ。

### 3

リストラ同然で会社を辞めて以来、なんだかんだと理由をつけて働かなくなった夫に嫌気がさして調停を申し立てたのは10年前、3回目の調停で離婚が成立した。母子家庭には経済支援もあり、事務のパートで勤めていた会社が離婚後、正社員として採用してくれたので、ニート亭主と生活しているころより、経済的にはよほど楽になった。離婚時、優太は4歳。保育所にも小学校にもシングルマザーは珍しくなく、父親が不在だからといってイジメられる心配はないだろう、とたかをくくっていた。

母子が暮らすアパートはキッチン続きの小さなリビングと勉強部屋兼寝室の2間。残業がある日でも午後7時過ぎには帰宅できたので、夕食は必ず向かい合って食べた。そんな時、優太は昼間あったことを楽しそうに報告するのが常だったが、中1の終わりごろから、めっきり口数が減り、笑顔も見せなくなった。それどころか、母親の自分と目さえ合わせようとしない。ほとんど食欲のない日もあった。

とうとう思春期が始まったのか、と納得しかけて、思い直した。食欲を失う思春期などあるはずがない。「もしかして、イジメ？」と嫌な予感が芽生えた矢先、優太が頭に傷を負って帰ってきた。我を失い、つかみかかって問い詰めると、優太はしばらく黙ってうつむいていたが、やがて「同級生にイジメられている」と、しゃくりあげながら打ち明けた。

同級生3人によるイジメが始まったのは中学入学直後。最初は変なあだ名をつけられたり、悪口を言われたりという冗談半分の遊びのようなものだったらしいが、そのうち金銭要求や暴力に発展していく。性格がおとなしい優太は嫌なことをされても強く言い返すことをしないため、イ

ジメられやすいタイプだったのだろう。

翌日、学校に電話をして担任に相談したものの、まだ20代の男性教師は頼りなく、「しばらく様子を見ましょう。何かあったら連絡して下さい」と告げるだけだった。何かあったからこそ、相談したにもかかわらず。担任のずさんな対応には、シングルマザーへの侮りがあるようにしか思えなかった。このままでは自殺はもちろん、部屋にひきこもってしまうことも心配だ。思い余った智子が「金沢プライベート・リサーチ」に相談へ行くと、オネエ言葉を話す初老の所長がこう言った。

「イジメられる子どもはプライドや羞恥心、恐怖心から、イジメの事実を隠したがるの。たった一人で苦しんで耐え、時には自らの命を絶つことだってあるわ。だけど、もう安心。イジメは不幸な出来事だけど、発覚したことは不幸中の幸いよ。さあ、息子さんの救出作戦を始めましょう！」

#### 4

「この中学の学区内でイジメが発生しているとの情報が寄せられました。保護者や地域の皆さんはどうか注意して子どもたちを見守って下さい」

七三の髪型、地味なメタルフレームの眼鏡をかけ、ねずみ色のスーツに身を包んでイケメンオーラを消した透がイジメ加害者の自宅周辺を中心に、軒並み家庭訪問を行ったのは、それからほどなくのことである。訪問の際には「日本イジメ撲滅委員会」という架空の団体が発行した「イジメに注意！」と印刷したチラシも配った。とはいえ、特定のイジメを告発したわけでも、加害者を名指しして非難したわけでもなかった。透が校区の家庭訪問を続けている間、市山は依頼人に頼んで優太を「金沢プライベート・リサーチ」のオフィスに呼んだ。

「僕はまたイジメられないかな」

不安そうに口を開いた優太に、市山が言った。

「あなたは一人じゃない。お母さんがいるし、あたしもいる。もしまたイジメられるようなことがあったら、全力であなたを守る」

決して愛想はよくないものの、市山の言葉には優しさがにじみ出ていた。

「本当？」

「でも、これだけは覚えておいて。今回のような奇襲作戦は二度と使えないってことを」

「そうなの？」

いぶかしそうな表情で優太が問い返す。

「残念ながら、イジメは学校に限ったことじゃなくて、社会に出ても存在しているの。あたしは大人になったあなたを守ってあげられない」

「僕はどうすればいいの？」

優太が泣いていた。

「強くなれ、とは言わない。でも鎧を着ることはできるでしょう？」

透の訪問を受けた保護者や地域住人の幾人から問い合わせを受けた中学校は、上を下への大騒ぎとなった。訪問されなかった住民の間にも瞬く間にうわさは広がり、中学生の子どもを持つ親たちは「自分の子がイジメられていないか」「イジメてはいないか」と我が子の動向を注視。中学側でもいつにも増して、生徒たちに気をかけるようになり、その結果、優太へのイジメはぷつりと影を潜めた。「金沢プライベート・リサーチ」のオフィスで、市山と透が調査を振り返っている。

「うわさを使ってイジメの注意喚起するとは、うまい手を考えましたね、所長」

「鏡で身だしなみをチェックする時、前だけ見てちゃダメ。後ろ姿や横の姿など見えにくいところも確認して初めて素敵になれるの」

「鏡とイジメがどんな関係があるんです？」

「イジメを解決するには、まずは大人たちが子どもをよく見てイジメに気付くこと。先生、親、地域の人々といういろんな視点から子どもたちを見守ってもらおうと思ったのよ」

「なるほど。それなら所長も鏡で自分自身をよ〜く見た方がいいですね」

半年後、市山と透が空手道場に通い出したという優太の様子を見に行った。調査を終えた市山が知人の経営する道場に優太を紹介したのである。ピンクのパンツスーツ姿で道場に現れた市山は、男を隠すため、ファンデーションにアイライン、マスカラとコテコテの厚化粧。バストには豊胸パッドを忍ばせて膨らみを持たせる念の入れようだった。

「尾行でも張り込みでもないのに、別に女装する必要はないじゃありませんか、所長」

ため息をついた透が苦情を申し立てると、市山が答えた。

「あたしにとって、女装は、ガラスの靴、なの。この洋服を脱いだ瞬間、世界は魔法が解けてシンデレラの馬車のようにカボチャに戻ってしまうのよ」

「何をメルヘンなこと言ってるんですか。カボチャみたいな顔して」

「ひ、ひどいわ、トオルちゃん！」

道場の入り口で市山が泣き崩れる。畳の上では道着姿の優太が小中学生の練習生に混じって稽古していた。痩せっぽちだった体に心なしか筋肉がつき、目や眉のあたりに精悍な気配が漂っている。もう市山の前で肩を震わせていた弱々しい少年ではなかった。はつらつとしたかけ声を響かせて蹴りや突きの基本技を繰り返す優太をまぶしそうに見つめながら、市山が言った。

「どうやらイジメを跳ね返す、鎧、を着たようね。いつか、あなたが一人前の男になった時、一緒にお酒を飲みましょう。その日を楽しみに待ってるわ」

市山が優太に向けて、盛大な投げキッスを送った。